

『都道府県審判指導員マニュアル第1版(2016年改訂版)』修正一覧

ページ	現 行	修 正
8	<p>2 ジェスチャー（アウト／セーフ）の反復練習 （5）アウトのコール</p> <p>② そして、右ヒジを顔の高さまで上げます。このとき腕の力を抜いて（ヒジは自然と90度程度に曲がります）、手は頭より後ろにある状態となります（手のひらは自然に開いたままです）。（写真①）</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ヒジが低いと手が顔の前で止まってしまい、キレのあるジェスチャーができません。（写真②） <p>③ 『ヒー・イズ・アウト』“He is out!” のコールとともに、ヒジを肩の高さに下しながら、ヒジを基点に腕を振り下ろします。このとき手（軽く握りながら）は頭の上から弧を描くように通ってきます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ この「腕を振り下ろす」ときのスピードが、キレのあるジェスチャーにつながります。 	<p>2 ジェスチャー（アウト／セーフ）の反復練習 （5）アウトのコール</p> <p>② そして、右ヒジを<u>肩の高さまで</u>上げます。このとき腕の力を抜いて（ヒジは自然と<u>45度程度</u>に曲がります）、手は<u>顔の前にある状態</u>となります（手のひらは自然に開いたままです）。（写真②）</p> <p>③ 『ヒー・イズ・アウト』“He is out!” のコールとともに、<u>ヒジを基点にして手を握りながらドアをノックするようにコブシを前に突き出します。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ■ この「<u>コブシを前に突き出す</u>」ときのスピードが、キレのあるジェスチャーにつながります。
28	<p>7 ストライク／ボールのコール （3）ストライクのコール</p> <p>② そして、右ヒジを顔の高さまで上げます。このとき腕の力を抜いて（ヒジは自然と90度程度に曲</p>	<p>7 ストライク／ボールのコール （3）ストライクのコール</p> <p>② そして、右ヒジを<u>肩の高さまで</u>上げます。このとき腕の力を抜いて（ヒジは自然と<u>45度程度</u>に曲がります）、手</p>

	<p>がります)、手は頭より後ろにある状態となります(手のひらは自然に開いたままです)。(同写真③)</p> <p>■ ヒジが低いと手が顔の前で止まってしまう、キレのあるジェスチャーができません。</p> <p>③ 『ストライク』のコールとともに、ヒジを肩の高さに下しながら、ヒジを基点に腕を振り下ろします(写真④)。このとき手(軽く握りながら)は頭の上から弧を描くように通ってきます。</p> <p>A) この「腕を振り下ろす」ときのスピードが、キレのあるジェスチャーにつながります。</p>	<p>は<u>顔の前にある状態</u>となります(手のひらは自然に開いたままです)。(同写真③)</p> <p>③ 『ストライク』のコールとともに、<u>ヒジを基点にして手を握りながらドアをノックするようにコブシを前に突き出します</u>。(写真④)。</p> <p>A) この「<u>コブシを前に突き出す</u>」ときのスピードが、キレのあるジェスチャーにつながります。</p>
5 9	<p>1 1 1 塁のフォースプレイ</p> <p>(4) 打球が打たれてから (Go)</p> <p>③ 省略</p> <p>■ 「リード・ステップ」とは、両足がファウルラインと平行になるように左足を一步踏みだし、打球を処理する野手に正対するステップです。外野への打球判定のときにも、このステップを用います。</p>	<p>1 1 1 塁のフォースプレイ</p> <p>(4) 打球が打たれてから (Go)</p> <p>③ 省略</p> <p>■ 「リード・ステップ」とは、両足がファウルラインと平行になるように<u>右足を一步引き(ドロップ・ステップ)</u>、打球を処理する野手に正対するステップです。外野への打球判定のときにも、このステップを用います。</p>
7 7	<p>1 2 2 塁を起点としたダブルプレイ (2 塁塁審)</p> <p>(e) 2 塁から 1 塁への転送のときの注意点 (2 塁手側に位置した場合)</p> <p>③ そこで、投手、捕手、または 1 塁手が 2 塁へ投げ</p>	<p>1 2 2 塁を起点としたダブルプレイ (2 塁塁審)</p> <p>(e) 2 塁から 1 塁への転送のときの注意点 (2 塁手側に位置した場合)</p> <p>③ そこで、<u>まず打球が投手より 1 塁側に打たれたら</u>(投手ゴ</p>

	<p>たボールを、大きく右足を踏み出しながら右手でつかみにいくようなイメージでやり過ごし（次頁の写真①）、その右足を基点にターンして2塁ベースに正対します（スタンディング）（次頁の写真②）。</p>	<p><u>ロ、送りバント）、</u> A) <u>まっすぐ前に右足を踏み出し、</u> B) <u>次に、身体が投手板と2塁を結ぶ直線と平行になるよう左足を踏み出します。このとき顔は野手に向けたままで、ボールから目を離さないようにします。</u> C) <u>投手、捕手、または1塁手が2塁へ投げると同時に、右足を一步引いて（ドロップ・ステップ）、身体の一部をベースに正対させて、スタンディングでプレイを待ち受けます。</u></p>
93	<p>14 2塁盗塁のビュー・トレーニング (b) 実施方法 ① 受講者は、本塁に向かって（顔は送球者の方を向いて）セットポジションの姿勢で正対しています。（写真①）</p> <p>②～⑤省略 ⑥ 受講者は、送球者がテイクバックしたときに、2塁ベース側の足（2塁手側に位置したときは右足、遊撃手側に位置したときは左足）を、斜め後ろに（ベースに向かって）一步踏み出します（ワン・ステップ）。しかし、まだ顔は送球者の方を</p>	<p>14 2塁盗塁のビュー・トレーニング (b) 実施方法 ⑥ 受講者は、本塁に向かって（顔は送球者の方を向いて）セットポジションの姿勢で正対しています。（写真①） また、2塁手側に立った場合は1塁と2塁を結ぶ直線と、遊撃手側に立った場合は2塁と3塁を結ぶ直線と、それぞれ平行にスタンスをとり、顔を本塁に向けたセットポジションの姿勢でも構いません。</p> <p>②～⑤省略 ⑥ 受講者は、送球者がテイクバックしたときに、2塁ベース側の足（2塁手側に位置したときは右足、遊撃手側に位置したときは左足）を、斜め後ろに（ベースに向かって）一步踏み出します（ワン・ステップ）。しかし、まだ顔は送球者の方を向いています。（次頁の写真①）</p>

	<p>向いています。(次頁の写真①)</p> <p>⑦ 次に、送球者がボールをリリースすると同時に、ボールの軌道が判断できたものとして、⑥で踏み出した足を基点にターンして(ツー・ステップ)、身体全部を2塁ベースに正対させながら、セットポジションをとってプレイを待ち受けま す。(写真②)</p>	<p><u>塁を結ぶ直線と平行にスタンスをとった場合、捕手が投球を捕ったときに、右足を(遊撃手側の場合は左足を)ベースに向けて踏みかえ、送球の軌道が判断できたらターンしてセットポジションをとることになります。</u></p>
99	<p>1 5 2塁盗塁</p> <p>(2) 2塁塁審の姿勢</p> <p>① スタンディングの姿勢で、打者に正対します。(写真①)</p>	<p>1 5 2塁盗塁</p> <p>(2) 2塁塁審の姿勢</p> <p>① スタンディングの姿勢で、打者に正対します。(写真①)</p> <p>このとき、<u>2塁手側に立った場合は1塁と2塁を結ぶ直線と、遊撃手側に立った場合は2塁と3塁を結ぶ直線と、それぞれ平行にスタンスをとっても構いません。</u></p>
99	<p>1 5 2塁盗塁</p> <p>(3) ツー・ステップ</p> <p>① 捕手が投球を捕ったらすぐに(捕ると同時に)、2塁手側に位置したときは右足(遊撃手側に位置したときは左足)を、捕手から目を離さずに、斜め後ろに(ベースに向かって)一歩踏み出します(ワン・ステップ)。(次頁の写真①)</p>	<p>1 5 2塁盗塁</p> <p>(3) ツー・ステップ</p> <p>① 捕手が投球を捕ったらすぐに(捕ると同時に)、2塁手側に位置したときは右足(遊撃手側に位置したときは左足)を、捕手から目を離さずに、斜め後ろに(ベースに向かって)一歩踏み出します(ワン・ステップ)。(次頁の写真①)</p> <p><u>塁を結ぶ直線と平行にスタンスをとった場合、捕手が投球を捕ったときに、右足を(遊撃手側の場合は左足を)ベースに向けて踏みかえ、送球の軌道が判断できたらター</u></p>

		<u>ンしてセットポジションをとることになります。</u>
107	16 3塁盗塁 (3) ツー・ステップ ① 省略 ② 省略	16 3塁盗塁 (3) ツー・ステップ ① 省略 ② 省略 ③ <u>3塁盗塁の際に、内野内に入らず、ファウルテリトリで判定しても構いません。この場合の判定する位置は、投手板と3塁を結ぶ直線の延長線上（ファウルラインと45度のライン上）を目安とします。</u>
108	16 3塁盗塁 (3) スリー・ステップ ① 省略 ② 省略	16 3塁盗塁 (3) スリー・ステップ ① 省略 ② 省略 ③ <u>3塁盗塁の際に、内野内に入らず、ファウルテリトリで判定しても構いません。この場合のジ判定する位置は、投手板と3塁を結ぶ直線の延長線上（ファウルラインと45度のライン上）を目安とします。</u>
119	17 本塁のタッグプレイ (6) 走者2塁、外野へのゴロのヒット ④ 省略	17 本塁のタッグプレイ (6) 走者2塁、外野へのゴロのヒット ④ 省略 <u>【検討】</u> <u>2016年のシーズンから、ほとんどの捕手は本塁の前に立ち、片手（右手を添えない）でタッグする（他の内野手と同</u>

		<p><u>じタッグの方法) ようになりました。他方、走者は、以前から3塁側に回り込みながら左手で本塁に触れるスライディングが多く、ほとんどのケースで捕手がスワイプタッグをするようになりました。(114頁写真②を参照)。</u></p> <p><u>この場合、タッグポイントは写真のコマ送りのように変わり、「グラブ・ランナー・アンパイア・コンセプト」(110頁を参照)により、球審もタッグポイントを読みながら右側(内野内)に回り込む必要があります、ハンズ・オン・ニーズ・セットポジションをとる時間はありません。そこで、「左足を前・右足を後」と足を前後に開いたやや中腰の姿勢(スタンディング・シザース)でジャッジしても構わないこととします。</u></p> <p><u>スターティングポジション(投球を判定する位置)からジャッジするまでの動き方は、次のようになります。</u></p> <p><u>A) 本塁への送球が近づいてきて、その軌道がほぼ捕手に向かっている(捕手が移動しなくてもボールを捕れる)と判断できたら、スターティングポジションから、三塁→本塁の延長線上で本塁から2～3mの位置に移動して(これ以上離れると、その後のタッグポイントの変化に対応できなくなります)、スタンディング・シザースの構えをとり、素早く動ける態勢でプレイを待ち受けます。</u></p> <p><u>B) このとき、左足を三塁→本塁の延長線より1塁側に置かないと、スライディングした走者と接触する危</u></p>
--	--	--

		<p><u>険があります。</u></p> <p>C) <u>また、送球が3塁側にそれた場合、走者が3塁ダッグアウト側に大きく回り込んだり、または内野内に切れ込んでくることがあり、タッグポイントが瞬時に変化するため、スターティングポジションからタッグポイントが確認できる位置に移動します。</u></p>
--	--	--